

A photograph of a rocky, moss-covered mountain slope. The foreground and middle ground are dominated by grey, textured rocks, many of which are covered in dark green moss. Sparse vegetation, including small green plants and some dried, brownish leaves, is scattered across the rocky surface. The background shows a continuation of the rocky terrain, partially obscured by more dense green foliage on the left side. The overall scene is a natural, rugged landscape.

山が滑る

柳瀬川ひろし

「おまんら、何食べゆうがで」

子どもが話しかけているのは大きな岩だ。通り掛かりの者が見たらそう思うだろう。しかし、もう少し近付いて注意深く観察するとその相手が小さな苔であることに気付く。

子どもの名は新吉。

^{ひじり}聖岩と呼ばれるこの大岩で、村人たちがもう何年も見続けてきた光景である。

新吉は聖岩でしか見ることのできないこの黄褐色の丸い葉を持つ苔に自分を重ね、親近感を持って接しているような節があった。

新吉は二歳を過ぎるまで歩くことをしない子だった。言葉を発することは全くなく、常に一人静かに遊んでいた。三歳の頃から、祖父の作ってくれた虫かごに甲虫を集め、夏が終わるまで大切に飼うようになった。剣術にはあまり興味を示さず、祖父にくっ付いて田や畑に行くのを好んだ。七歳の頃より体がぐんぐん大きくなったが、同年代の子らに混じって遊ぶことはなかった。

母菊はそんな新吉のことを案じていたが、父新之丞は特に気にかけるふうでもなく、好きなようにさせていた。その父も新吉が十四歳になってからというもの、菊に話しかけているのか独り言なのか、「来年は新吉にもお役所勤めをさせにやあならんかのう」とつぶやくことが多くなっていた。

両親の心配を知ってか知らぬか、新吉は祖父新之介が丹誠込めて耕してきた僅かばかりの畑の草取りに余念がなかった。

そろそろ梅雨明けを迎えようかという十日前後から、百姓たちが田の畦や山間の段々畑に大豆や小豆を蒔く姿が盛んに見られるようになると、新吉は手慣れた様子で大切に取り置いていた大豆の種を祖父の畑に蒔く準備を始めた。

祖父からこの畑を任されたのは新吉がやっと小声で話し始めた十一歳の春であった。それ以来毎年そうしてきたように、今年も一粒一粒に願いを込めて優しく土を被せていた。立派な大豆ができますようにと。

梅雨明け間近に降った雨が幸いしたのか、大豆はいつになく順調に発芽し、乾いた畑に瑞瑞しい若葉を繁らせていた。新吉は毎日畑を見ては今年の豊作を確信するのだった。

しかし、月末の二十六日頃より雨が降り始め、皆がちょうどのお湿りでと笑顔で挨拶を交わしていたのも束の間、いつまでたっても雨が上がらないまま文月を迎え五日を過ぎた頃になると、心配顔で村のお社に願掛けする者が引きも切らずの有様となっていた。

七日の雨は家の中で話も儘ならないほどの激しきで降り、八日になっても一向に止む気配を見せなかった。それは新吉の曾祖父左右衛門が大川の堤を守るために命を落とした年の大雨に匹敵するほどの激しきで降り続いた。雨の合間に覗いた大豆畑は表層の土が流され、根付いたはずの大豆は悉くなぎ倒されていた。

父は、大川の堤が其処彼処で切られる前に何処か一ヶ所を切り、濁流の一部を逃がすことで少しでも田畑を守ろうと考え、百姓たちと日夜話合いを続けていた。

そんな父にはもう一つ気懸かりなことがあった。それは村の山田を潤す一筋の小さな沢のことだった。山田を詳しく調べていた曾祖父は、田の底に多くの山から流出した石が埋まっていることに気付いていた。そして村の古老から聞き取りを行い、百年以上も昔、山が滑り、危うく村全体が土石流に飲み込まれるところだ

ったという事実を掴んでいた。

「家の中で話ができないほどの激しい雨が二日続いたなら、山が滑る」

それが村を守ることに命を懸けていた曾祖父の口癖であった。
雨足が弱まらぬまま迎えた九日早朝、父は一旦家に戻ってくると新吉を伴って山田に向かった。父と山田に行くのは珍しいことではなかったが、今日の父はいつもの父とは違ってより大きく見えた。途中、沢の水がかつて見たこともないほどに増えているのが分かった。

新吉は素直に怖いと思った。下手の田から上しもてに上がるにつれ鉄砲水のように吹き出る水が田に溢れているのが分かった。畦を切って水を逃がしていたにもかかわらず、田は一筋の川に姿を変えていたのだ。

一番上手かみての田に着くと、そこはすでに土石で埋まっており、緑色の稲の穂先が僅かに覗くだけとなっていた。新吉が恐ろしさにただ佇んでいると、父が湧き水をじっと見ながら太い声で言った。

「湧き水が泥水になったら聖岩に登れ」

聖岩とは、村の社に祭られている神様のご神体のことである。一番上手の田の北東の角地に突き出ている大岩だ。聖岩は高さ二丈ほどの中央に割れ目のある岩だ。その割れ目には一本の松の木が根を張っている。松の樹齡ははっきりしないが、皆は源げんじい爺の松と呼んで昔から手を合わせている。

「山が滑るぞと大声で知らせろ。よいか新吉」

新吉は父を見た。父は振り返って新吉を正面から見詰めると、もう一度念を押しように頷いた。

「村人の命が懸かっておる。お前の命に替えても知らせるのじゃ

」

帰り際、父はこうも言った。

「滑る前には山が鳴く。まるで地震のようじゃ。そうなってからでは遅い。泥水になったら大声で叫べ」

新吉は頷くばかりで一言も発することができず山田を下りた。

家に着くと父は再び大川の堤に向かう準備をしながら、穏やかな笑みを浮かべていた。

「何が起こっても源爺の松にしがみついておれ。聖岩が滑ることはない」

父が曾祖父のように命懸けで堤に向かうのだということを、新吉はその微笑みの中に感じ取った。振り返ると母は聞こえぬふりをして大きな鍋に味噌汁を作っている。いつもなら大きな瞳をさらに見開き案じてくれる母が、表情を変えることなく土間にいることで、新吉は母の思いも汲み取ることができた。

父は握り飯を持つと母の肩を軽く叩いて戸を開けた。庭先はすでに川となっていた。溢れた水は低い土地を求めて我先にと流れ、雨は桶を引っ繰り返したような勢いで地面を叩いていた。

「新吉、頼んだぞ」

父はそう言うと笑顔で飛び出して行った。

母は静かに父を見送るとしばらく空を見ているようだった。戸を閉めて振り向いた母はいつもの穏やかな、それでいて新吉を気遣う優しい表情になっていた。

「握り飯持って行くかえ」

新吉は大きく頷くと身支度を整え土間に下りた。

「新吉、縄を持って行きや。聖岩が動くことはないと思うが、念のためじゃ、源爺の松に縄をしばっちょきや。あんたの命綱やけの」

母は新吉の腰に藁縄を二重に巻き固く結んでくれた。握り飯の入った包みを胸の前にたすき掛けすると新吉は母を見た。

「父上は大丈夫ですか」

「心配いらん。それよりあんたの方が心配じゃ。もしも山が滑ったら、自分のことだけ考えや」

母の瞳が潤んで見えた。新吉は気付かぬふりをして視線を逸らし戸口に立った。行って参りますと大きく声を出すと、振り返ることなく戸を閉めて豪雨の中に飛び出した。

ついさっき父と見た山田は、さらに勢いを増した湧き水で膨れ上がっていた。石垣を築き美しい棚田を造ったのは、もう誰もその名前を覚えてはいない遠いご先祖様たちだ。その石垣の上を滝のように流れ落ちる水は、これが本当に山に降った雨なのかと疑わずにはいられないほどの量になっていた。

幸いなことに水はまだ透き通っている。けれど注意深く耳を傾けると、雨音や水音に混じって石ころの転がるガラガラという小さな音が聞こえる。

新吉は顔を上げると上流の山を見た。山は真っ黒な雨雲に押し潰されそうになりながら、歯を食い縛って立っているように見えた。雨よ止んでくれと念じながら、山田の上流を凝視し、木々の間から吹き出すように流れ出る水にじっと目を凝らしていたその時、一筋の閃光が目の前を過ぎ^よった。間髪を入れず雷鳴が轟き一瞬山がその奥底から大きく揺らぐのを感じた。そこへ豪瀑にでも迷い込んだかのような猛烈な雨が襲ってきた。

新吉は考えるよりも早く身を翻すと一目散に聖岩に向かった。聖岩は幼い頃からの遊び場であり、新吉が家族以外で唯一心を開くことができた場所であった。新吉は自らの命綱を源爺の松に縛り付けると岩に腰を下ろし、いつもの話し相手である苔に視線を落とす。

「大事な何か？」

新吉はすでに決心していた。叫ぶのだと。かつて一度も大声を発

したことのない自分が、今日こそは村中に聞こえるほどの大声を出すのだと。それをやらなけれ

ば生きている価値はない。今初めて誰かのために命を懸けるということ、震える体を両腕で強く抱きしめながら決意していた。

閃光を見てからどのくらいの時間が経っただろう。目の前の流れが心なしか濁ったように感じた。下流の村を見ると、幾人もの村人が外に出て山を見上げているのが目に入った。

腰を下ろした岩が新吉の尾てい骨の下で微かに震えた。瞬間、苔が何かを囁いた気がした。新吉は今だと悟った。

「山が滑るぞお。逃げろおお」

村人たちは、何かを聞き取ったようにも見えたが、動き出す気配はない。

逃げてくれ、頼む。

「滑るぞおお、逃げろおおお」

新吉の祈るような視線の先で村人たちが連れだって反対斜面上り始めるのが見えた。

山は一瞬穏やかな表情を見せ、ゆっくりと滑り始めた。